

リング樹の解体調査成績

酒井政伸・城倉友幸・熊代克巳[※]

昭和22年春（本学部の前身である長野県立農林専門学校時代）に栽植された、34年生のゴールデン・デリシャス樹3本を、改植のために切倒すことになったので、参考のために、地上部を解体秤量して記録を残すことにした。地下部は、隣接樹とかなり交錯していたので正確を期しがたいし、また労力的にも余裕がなかったので、今回は調査を見送った。

調査方法

解体調査は昭和54年12月12日に行なった。幹周は、地上から約30cmの高さで測定した。主幹高は、最上位の主枝の分岐点までを測定した。樹高は、主枝の頂枝の高さを測定し、その平均値で示した。主枝長は、主幹からの分岐点から頂枝までの長さを測定した。新梢重は、長さ約10cm以上のもののみを秤量した。短果枝および10cm未満の新梢を着けている、いわゆる成り枝を細側枝として秤量した。細側枝はおよそ、直径がほぼ1～3cmで、枝齡が2～5年生であった。側枝は、垂主枝から分岐した骨格枝の直径約3～5cmの部分と、さらに主枝および垂主枝の先端部で直径約5cm未満の部分を加えて秤量した。したがって、主枝および垂主枝は、それぞれの分岐発出部から直径約5cmの部分までを秤量した。

調査結果

幹周および総重量は、3樹の間にかかなりの差があり、とくにNo3樹は生育が劣っていた。これは、No3樹が昭和34年9月27日の台風襲来時に倒伏したことの影響が大きいと思われる。このことは、主幹の年輪幅からもうかがえた。

平均主枝長はいずれも、株間（7×8m）の半ばを越えており、隣接樹とかなり交錯していた。

重量比率が最も大きかったのは、3樹共、主枝重であり、次いで垂主枝重、主幹重の順であった。そして、主幹、主枝、垂主枝および側枝を合計した、いわゆる骨格枝の重量は、全体の89～90%を占めており、それ以外の、直接葉および果実を着ける細側枝および新梢の重量は、全体の10～11%に過ぎなかった。

一般に、果実生産効率の高い樹ほど骨格枝の比率が低いといわれている。今後機会をみて、果実生産効率が高いとされている、わい性樹を解体調査して、本結果と比較検討すれば興味深いと思われる。

謝辞：本調査に協力して下さった、果樹園芸研究室佐藤助教授および専攻生の諸君に感謝の意を表します。

※ 果樹園芸学研究室

表1 34年生リンゴ「ゴールデン・デリジャス」(ミツバカイドウ台) 樹の解体調査成績

調査項目	樹	Na 1	Na 2	Na 3
幹 周	cm	114	108	91
主 幹 高	cm	130	112	130
樹 高	cm	482	473	460
主 枝 数		4	3	4
亜主枝数		15	12	15
平均主枝長	cm	503	504	436
主 幹 重	kg(%)	109 (13)	114 (15)	92 (16)
主 枝 重	kg(%)	446 (51)	363 (48)	275 (48)
亜主枝重	kg(%)	156 (18)	147 (20)	101 (18)
側 枝 重	kg(%)	68 (8)	53 (7)	42 (7)
細側枝重	kg(%)	67 (8)	57 (8)	45 (8)
新 梢 重	kg(%)	23 (3)	18 (2)	15 (3)
総 重 量	kg(%)	869 (101)	752 (100)	570 (100)